RIST30年、これから

（公財）くまもと産業支援財団 理事長
奥薗 惣幸

当財団がRIST事務局を担当してから30年、当時の状況を知る人も少なくなった。私も古株のほうだが、記憶が定かなのは最近の10年くらいだ。設立以来、数多くの事業や企画が熱い思いで実現された。決して平たんな30年ではなかったが、それぞれの活動を担った先達の皆さんの志、そして御苦労に改めて敬意を表したい。

RIST結成の発端はテクノポリス計画だったと思う。当時、時代の旗手だった細川知事の看板政策である。高遊原台地に忽然と出現したリサーチパークはその象徴。そしてRISTは、その動きを内側から盛り上げる産学官連携の先駆的な例として注目を集め、その活動を通じて、技術水準を大幅に向上させた地場企業はセミコンフォレスト（半導体産業の森）の一翼を形成することになる。

しかし、その後いわゆる「失われた20年」に突入する中で、官民連携の周辺環境は次第に厳しくなる。熊本テクノの研究の中核だった電応研は撤退し、集まった研究者は散りじりになる。こうした中、RISTは10年前に「知能システム技術研究会」から「くまもと技術革新・融合研究会」に改名して、活動をスリム化した。

RISTが長く続いている要因の一つには、この時の判断もあったと思う。身の丈に合わせた運営が、その後10年のRIST活動に安定感をもたらし、知恵の触発、育む場として技術者同士の交流が、現在の産学官活動の礎になって今を支えている。3年前、熊本地震で多くの企業も大きく被災したが、お互いに連携を取りながら震災復興にまい進できた。RISTなどの活動を通じて、我々は、同じ釜の飯を食った仲間になっていたのだと思う。

また、運営の中心を大学が担っていることも大きいと思う。RISTの歴代会長は熊大の先生にお願いしている。知の源泉である純粋な探求心が、常に時代の最先端の何かを追いかけており、古さを感じないのはその賜物だろう。

この30年はベルリンの壁が崩壊した平成元年からの歴史と重なる。自国ファーストの超大国アメリカと急速に国力を増す中国の狭間で翻弄されている日本だが、両国との貿易収支では依然として大幅な黒字をキープしている。「スマートフォン、中を開けば日本製」、斜陽の日本がなんとか踏みとどまっているのは、知名度のない「ものづくり企業」の存在である。

AIやIoTが急激に世の中を変えようとしている。現在はピンチだが、チャンスでもある。研究者、技術者が未知なる遭遇を繰り返す中で、新たな産業技術が生まれてくる。「何をしたいのか。」志を持って、RISTに顔を出し、世の中がどのように変わるかではなく、是非、変える側に参加して欲しい。